

産地、今(11)

リレ一随筆

岩手県のキャベツの産地

(岩手県病虫害防除所企画指導係 おおともれいし 大友令史)The Introduction of Cabbage District in Iwate. By
Reishi OHTOMO

(キーワード：産地だより、岩手県、キャベツ)



交信かく乱剤設置圃場(左)とエンバク導入圃場(右)

岩手県は本州の北東部に位置し、東西約122 km、南北約189 kmと南北に長く、北海道に次ぐ153万 haの広大な面積を有している。しかし、山林が多く林野率は76%にもものぼる。また、本州北部に位置しているため気候は冷涼である。そのため広大な土地と冷涼な気候を利用し、野菜、特にレタス、ダイコン、キャベツなど土地利用型の品目が中山間地域の傾斜地で多く栽培されている。中でもキャベツは1997年から岩手県の牽引的役割を果たす品目として重点的に推進を図っており作付面積、生産量、出荷量とも前年を上回っている(平成12年度産)。

キャベツ産地としての沿革

岩手県におけるキャベツ栽培の歴史は古く、1874年の試作栽培までさかのぼる。その後、1910年に「南部甘藍」として当地方に適する系統が選抜され、昭和初期には面積生産量とも増加し、第二次世界大戦のころには長野を抑えて日本一の産地となった。しかし、1950年には結球内部に小さな黒斑を生じるゴマ症(ネギアザミウマによる被害)により、商品価値が著しく低下し、以後価格の低迷にあえぐこととなった。これに加えて、長野県や群馬県の高冷地から市場距離有利性により良質な品種が大量に出回ったことが価格の低迷に一層拍車をかけた。また、1961年に農業基本法の制定により野菜も多品目生産へと移行し産地間競争の時代に入った。岩手県でもこの流れの中でレタスなどの他品目におわれキャベツの産地は縮小した。

現在、本県におけるキャベツの主産地は一戸町、岩手町、西根町の岩手郡下で、作付面積は県内のほぼ50%、生産量で61%(平成12年度産)となっている。

病虫害防除に対する意識

農作物を生産するうえで病虫害防除は避けて通れない問題である。従来の病虫害防除は化学合成農薬により生産性を上げることを目的として行われていた。しかし、コナガにおける薬剤抵抗性個体の出現や根こぶ病に見られる薬剤の感受性低下などが全国的に見られるようになってきた。加えて近年の環境問題、BSEおよび偽装表示に見られる食の安全性に対する不安から減農薬栽培をもとめる消費者ニーズも強くなっている。また、生産者自身も産地間競争を意識した農産物の差別化への取り組みについて意欲的であり、特に減農薬技術については興味をもっているようである。

栽培および出荷における差別化

本県で栽培されているキャベツは「いわて春みどり」と称される生食を意識した柔らかい系統(以後、春系品種)のものである。

京浜市場においては葉が柔らかく、良食味である春系品種が時期を問わず求められている。しかし、これらの品種は、葉が硬く巻のしっかりした寒玉系品種と比較して、一般的に耐暑性が弱く、高温多湿期の栽培では病虫害の発生が多い傾向がある。また、キャベツは生育適温が15~20°Cと冷涼な気候を好む野菜であるが、裂球が早く在圃性が低いなどの問題がある春系品種は、特に夏取り品種としては不向きであるといわれる。

本県のキャベツ作付面積は平成12年度産で全国12位であるが、夏秋作型の作付面積は同4位となっている。

これは本県では中山間地の冷涼な気候を利用し、夏

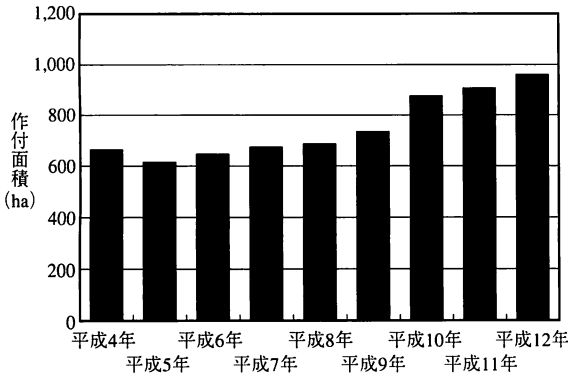


図-1 岩手県のキャベツ作付面積の推移

秋作型における春系品種の生産による差別化を図っているためである。

病害虫防除における差別化 ～減農薬栽培技術への取り組み～

ここ数年、リンゴにおいて性フェロモンによる交信かく乱剤の普及は目を見張るものがある。しかし、野菜で使用できる交信かく乱剤は少なく、現場での認識も少ないため本県では広く普及できる段階にはない。キャベツで使用できる交信かく乱剤にはコナガを対象としたコナガコンおよびコナガコンプラスがある。本県では2001年よりコナガコンプラスの現地試験を行い、2002年から現地で導入された。コナガコンプラスの導入により農家の殺虫剤散布回数は明らかに減っており慣行の6～7割程度となっている。また、殺虫剤散布にかかる農家の精神的な負担も減少しており、今後も使用面積は増加していくものと思われる。しかし、交信かく乱剤の導入にあたっては現場の指導員が従来の化学合成農薬と違うことを農家に認識させる必要がある。すなわち、交信かく乱剤は従来の化学合成農薬と異なり殺虫効果はない。そのため、コナガが多発した場合や、飛び込みによる加害が多かった場合は全く効果が見られないこともあり、常に圃場を観察し必要に応じて補完防除ができる体制を整えることが重要である。

病害で最も重要なのは連作による根こぶ病の発生と思われる。本県における根こぶ病の発生は1960年代半ばから見られ問題となってきた。現在はフルスルファミド粉剤を使用しているが、最近の研究でフルスルファミド粉剤の効果は静菌作用によるものであり、菌密度を減少させるものではないことがわかってきた。

このため、根こぶ病を出さない栽培管理が必要であり、本県では根こぶ病菌に対するおとり作物として効果の確認されているエンバクの導入をはかっている。エンバクは既に緑肥として流通しており価格も安いいため普及性が高い。また、キャベツ作付圃場のほとんどが中山間地域の傾斜圃場にある本県では、堆肥を散布することより緑肥としてのエンバクの導入が実用的である。またエンバクには線虫忌避効果、土壌物理性の改善等の効果がありキャベツの安定生産に有効であると思われる。

今後の課題

産地間競争にうち勝つための商品の差別化、特に減農薬栽培技術への取り組みにあたってはいくつか問題点がある。まず第一にあげられるのが減農薬栽培技術への認識についてであろう。一般に減農薬栽培技術の多くは、化学合成農薬を使った防除と異なり、ある程度以上の量的発生条件においては効果が見られない場合が多い。この点をよく理解した取り組みを行わないと、その技術自体を過小評価してしまい、普及にあたっては現地導入が進まなくなることが懸念される。

また、キャベツにおいても他の作物同様、減農薬栽培の難しさは、一つの病害または一つの虫害の防除だけでは技術として成立しにくいという点にあらう。例えば、本県でも今年から導入が始まったコナガコンプラスであるが、ウワバヤヨトウ、アオムシ、アブラムシの発生が見られる圃場では大きな減農薬にはつながらない。要するにコナガの発生だけが抑えられても他の害虫に対する防除が必要となる。キャベツの、特に殺虫剤の減農薬栽培技術の確立にあたっては、現在試験が行われている野菜の複合交信かく乱剤コンフューザーV等の一刻も早い実用化が望まれる。

また、減農薬栽培技術を行うにあたっては品種や肥培管理等により対象となる病害虫の発生を抑えることも重要なポイントとなる。そのため、減農薬栽培技術の実践にあたっては、病害虫防除をも含んだ総合的な栽培技術体系の確立とともに農家自らが自分の圃場の状況をよく把握することが必要であり、すべての農家ができる技術ではないと思われる。

幸い本県は、冷涼な気象条件にあるため病害虫の発生量は明らかに少なく、商品の差別化のための減農薬栽培技術の確立は西南暖地と比較して有利であり、今後ぜひ取り組む必要がある。